子どものいる暮らし―男・夫・父

私の言い分

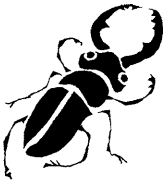
中島　隆

この春、長男は高校へ長女は中学校へと、それぞれ進むことになった。結婚して今年で十七年目、ハネムーン・ベイビーである長男と三つ違いの長女――この子らの成長が、そのまま我が家の歴史である。結婚した当初、妻は何が何でも仕事をして、家事も子育ても立派に両立させてみせる、と息巻いていた。ところが、臨月間近に休職に入り、いざ生まれてみると、これが計画どおりには行かなかった。バリバリの仕事人で、どちらかというとドライな彼女は、産み落としたとたん『聖母マリア』のように変身！　電車の中でマナーの悪い子どもを見るとあからさまに不快な表情でニラんでいたような彼女からは、想像もつかないような生活が待っていた。

当時、私は仕事が忙しく、帰宅は早くて九時十時頃。もともと身体の弱かった妻だが、初めての育児

は困難を極めた。疲労こんぱいして先に休んだ二人の寝顔を見て、ボソボソと遅い夜食を摂る――――というような日々が続いた。十月の末に生まれた長男が百箇日を迎え、「お食い初め」が済むと妻の職場復帰の準備が始まった。四月に入園する保育園も決まり、さて母乳を人工乳に切り替えて、とか保育園に入るまでの間、誰に見てもらうかとか。息子はよく太り、それとは対照的に妻は痩せてだんだん元気がなくなっていく。今から思えば、マタニティー・ブルーというものだったのだろう。赤ん坊が日に日に物がわかり、反応するようになってくると否が応でも可愛くて手放せなくなるものだ。かく言う私も、せっかく寝入ったところをつい起こしてしまい、「あれっ、おっきちまちたかぁ～」などと鼻の下をのばし、抱き上げては怒られた。赤ん坊の方もいい迷惑だったろう。ヘビースモーカーだった私たちは、お客にまで禁煙を言い渡し、寝返りを打った、腰がすわった、といっては写真を撮りまくった。休みの日は、儀式のように裸にして日光浴をさせ、「新しい子育て」に夢中になっていた。

そして、妻の職場復帰――――。妻の職場は、九時―五時で終わらない。息子を迎えに行き家に連れて帰り、食事の支度をして風呂に入れ、寝かしつけるまでを一人でやってみると三日でボロボロになった。些細なことでケンカが絶えなくなった。身も心も疲れ果てた妻は、仕事を辞めることで結論を出した。あの時、もう少し協力していれば……と思うが当時はそれでも精一杯だった。やはり、夫婦ふたりとも未熟だったのだろうと思う。妻は思ったよりも子どもを思う気持ちが強く、「結局、子どもを手放せなかったのよ」と照れ笑をしながら後輩たちに話している。それから三年後に長女が生まれ、経験を積んだせいか、私たちは子育てにも慣れて楽しむ余裕もでてきた。仕事



は相変わらず忙しかったが張り合いがあった。家に帰れば家族が待っている……それだけで良かった。他愛のないおしゃべり、騒々しいが日に日に成長していく子どもの様子は、何よりもうれしかった。

ただ、今の若いお父さんが「娘のピアノの発表会なので」といって仕事を休むのを聞いてびっくりしてしまう。私は、といえば息子の幼稚園の行事には、ほとんど行けずじまいだった。一度だけ、妻が病気で「這ってでも行く」と言った娘の遠足に代わりに行ったことがある。若いお母さんに混じって「お遊戯」をさせられ、泣きたいくらいだったが、娘の嬉しそうな顔を見て我慢した。

夏は海、冬はスキー。一年中戸外で遊ぶ機会をできるだけつくり、キャンプや登山にもよく行った。遊園地やテーマパークではなく、自然の中で自由に遊べる子になってほしいと思い、魚採りの仕掛けや虫取りのコツも伝授した。道具がなければ遊べないのではなく、あるものを使って工夫することを学んでほしいと思った。その結果、二人とも「遊べ遊べ型」人間になってしまった。特に下の娘ときたら「虫愛ずる姫君」そのものである。汚れたり、濡れたりを厭わない野生児になってしまった。冗談で「アフリカの自然動物保護監察官になれるぞ。マサイ族のお婿さんでも連れておいで」などと言っていたのだが、どうやら本気で考えているようなので、親の方がハラハラしている。息子はサッカーに夢中で「プロになる」と本気で思っている。進路もさっさと決めて、「親父、もうオレのシュートは止められないんじゃない？」などとぬかす。悔しいが、そうだろうと思う。小さいころから、体ごとぶつかってきてドタン、バタンとプロレスまがいの遊びをよくやってきた。世間では「中学生になると口もきかなくなって、親と子の距離をとりたがる」というが、我が家に関してはそう変わった様子は見られない。相変わらずチョッカイを出しては騒々しく肉弾戦を繰り返している。言葉に出してうまく表現でき

子どものいる暮らし

ない時は、特にそうである。だが、それも子どもの背丈が自分とそう変わらなくなってきた今、ときどき「ヤバい」と思うことがある。息子のほうが手加減している、と感じる時である。妻も娘も「あ～あ、また始まった」と取り合わないが、私は本気を隠して「でかくなりやがって」などと悪態をつきながら力が入るのだ。

我が家は来客が多い。核家族でしっとりと暮らすのもよいが、子どもにとっての大人が両親だけ、というのは我々のような未熟な大人が親をやっている場合、実に心細い。世の中には、いろんな価値観の人がわんさかいるのだから、日ごろからそういうことに慣れていたほうがいいと思う。私も妻も人を呼ぶのが好きなせいか、結婚したての頃からしょっちゅういろんな人が出入りしていた。だから、子どもたちは、人見知りもしないし、親以外の大人と話すのも平気である。いろんな人といろんな話ができる。私たちも子どもを介して人間関係が広がった。子どもたちの友達、その親や家族、習い事の先生や趣味の仲間たち。年齢層も幅広く、一緒にお茶を飲んだり食事をしたり。子どものいる暮らしは、私たちの人生に彩りを添え、厚みを増したように思う。

私たちの友人は、子どもにとっても友人であり、そのまた逆もあって連れて来た当人が居なくても楽しく過ごしたりできるから、これは有り難い。大人は威張らないし、子どもは素直である。妻の友人は、娘の親友だし、息子の親友は私の弟子である。このあたりのスクランブル加減が、とても気に入っている。

やがて、子どもたちが恋愛をするようになったら、きっと親を説得するためにこの中の誰かに相談するのだろう。それもいいと思う。

子どもたちが自立する頃には、我々夫婦はどこか遠くの島にでも移住して、たまにお客の一人として訪ねて行こうと思う。

（家具製造業）